

# 地域社会と「共創」する探究的な学びの創造

## ～「コミュニティ・スクール」を基盤としたPBLの実践！～

広島県北部に位置する三次市。江戸時代の町割りが残る歴史あるこの地域で、三次中学校区（三次中学校、三次小学校、河内小学校）は、「主体的な学びにつながる自己指導能力の育成」を掲げ、小中一貫教育とコミュニティ・スクール（以下、CS）を融合させたカリキュラム開発に取り組んでいます。

掲げるテーマは「探究×地域社会との共創」。子供たちが教室を飛び出し、地域の大人たちと本気で議論し、課題解決に挑み、学校と地域が一体となって熱気あふれる学びを生み出す、その実践の様子と仕組みづくりについて紹介します。



## 1. 取組のポイントと経緯

### ～「地域への愛着」を「未来を切り拓く行動」へ～

三次中学校区では、令和4年度より3校すべてに学校運営協議会を導入し、学校・家庭・地域が連携・協働する強固なネットワークを構築してきました。地域柄、お祭りや伝統行事が盛んであり、子供たちの「地域への愛着」は高い水準にありました。

しかし、各種アンケートや実態調査を詳細に分析すると、ある課題が浮き彫りになりました。それは、「地域は好きだが、地域のために主体的に動く経験が少ない」「自分にはよいところがあるという自己肯定感が低い」という点です。地域を「守ってもらう場所」として受動的に捉えていたのです。

「愛着を行動に変え、自ら課題を見つけ解決する力を育みたい」

そうした思いから目指したのは、単なる体験学習ではなく、正解のない地域の課題に対し、多様な他者と協働しながら最適解(納得解)を紡ぎ出す「PBL(Project Based Learning:プロジェクト型学習)」の展開です。研究の核となるのは、PBLの導入とCSの活用。子供たちが地域の課題に対し、地域の方(パートナー)と協働しながら納得解を紡ぎ出すプロセスを通じて、自己指導能力や社会参画意識を高めることをねらいとしています。

「まちづくりに参画・貢献し、高い志を持つ児童生徒」を育成像に掲げ、小学校低学年から中学校3年生まで、発達段階に応じた「探究のサイクル」を回すカリキュラムを開発しました。

## 2. 授業づくりのポイント:カリキュラム・マネジメント

### (1)三次中学校区の特徴：「探究×地域社会との共創」

三次中学校区が掲げるテーマは「探究×地域社会との共創」です。ここで言う「共創」とは、単なる協力関係にとどまりません。

「共創」とは、課題の解決策がない中でも、他者と協働し、試行錯誤しながら納得解を見出したり、新たな価値を創造したりすることを目指すことです。

この「共創」のプロセスを通じて、「まちづくりに参画・貢献し、高い志を持つ児童生徒」というキャリア観の構築を目指しています。

### (2)育成を目指す3つの資質・能力

9年間を通じて育成する資質・能力を、以下の通り定義し、各単元の評価規準に落とし込んでいきます。

能力	定義
コミュニケーション能力	自分の考えを持ち、他者の思いを受け止め、言葉で伝え合うことを通じて、互いを理解し、認め合える。
協調性	目的と目標を共有し、目標達成のために、自らの役割を理解し、他者と協力できる。
主体性	自らの夢と志を持ち、自ら行動することで新たな価値を生み出し、積極的に他に貢献しようとする。

### (3) PBLと小中連携の進化

従来型の「職場体験」を、PBLの視点を取り入れた「キャリアプランニング」へと進化させました。

#### 令和5年度までの活動



#### 令和6年度から(PBL化)



#### 異学年・異校種交流(小中連携)

中2の「職場体験報告会」に、キャリア学習中の小学6年生が参加しました。「年齢の近い先輩の実体験」を聞くことで、小学生は将来のイメージを持ち、中学生は「先輩としてのモデル」を示す意欲が高まるという相乗効果(Win-Win)が生まれました。

### (4)「教科横断」で深める探究の実践

中学3年生の「グッドタウンみよし Season3」では、地域の祭りや活性化企画において、各教科の学びを統合的に活用しています。

#### 【技術科 × 広報活動】

SNSでの情報発信にあたり、「情報モラル」や「著作権・肖像権(その画像は使っても大丈夫?)」の知識を活用し、効果的かつ適切な発信方法を探究しました。



#### 【数学科 × データ分析】

イベント来場者へのアンケート結果を収集しました。数学的な手法でデータを集計・分析し、「目標は達成できたか」「客層に合った企画だったか」を、客観的根拠(エビデンス)に基づいて検証しました。

### 【社会科・国語科 × 合意形成】

地域の方(商店街理事長や観光協会など)と交渉し、企画書を作成しました。相手を納得させるプレゼンテーションの仕方や、地域自治の仕組みを実地で学びました。



「子供たちが地域のために何ができるか」を問い続ける三次中学校区の実践では、CSが「支援者」から「共創のパートナー」へと変わることによって、子供たちは地域社会の「担い手」としての自覚を深めています。

## 3. 実際の授業のワンシーン

各校の実践の最大の特徴は、地域の方々を単なる「ゲストティーチャー(お客様)」として招くのではなく、共に課題解決に挑む「パートナー(共創者)」として巻き込んでいる点にあります。

### (1) 小学校高学年(河内小): 地域のつながりを深める「しあわせこうち食堂」

河内小学校の5・6年生は、「ふるさと河内きらっ☆とプロジェクト」に取り組みました。

河内のまちづくりに携わる方から、「誰もが元気に触れ合える町を未来につないでほしい。」「家にこもりがちな高齢者が少しでも外に出て活動できるようにしてほしい。」「地域の人が集まる場を作りたい。」「という思いから、しあわせこうち食堂を立ち上げられたという経緯を知りました。

そこで、「自分たちにできることはないか。」という話し合いの末に生まれた活動が、地域の人たちが集い、笑顔になれる場所「しあわせこうち食堂」の運営でした。このプロジェクトは、教科横断的な知見を総動員する「本気のビジネス体験」です。

#### ① 「しあわせこうち食堂」の企画内容の検討

「しあわせこうち食堂」に来られた方が世代を超えて交流し、笑顔になり、楽しい時間を過ごす中で心も生き生きと元気になれることを目指して企画内容を考えました。食堂の運営者に提案し、アドバイスを基に改善し、運営に携わりました。自分は何ができるかを考え、一人ひとりが目的を意識しながら来てくださった方に主体的に関わることができました。



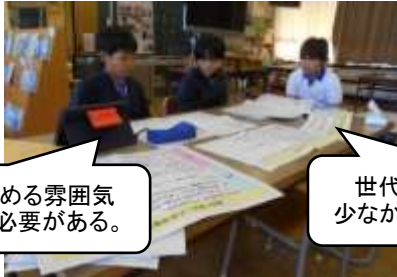
テーマは「ハロウィン」～秋の木の实を使ったリース作り・しおり作り～



お客さんの感想とニーズの調査

## ② 第2回の食堂運営に向けて

食堂運営を行った上での課題もありました。食堂の運営者やお客さんへのインタビュー、自分達が考えたことや感想を整理し、次回の食堂運営では課題を改善するための企画内容を考えました。この「振り返り」こそが探究の肝です。子供たちは食堂を運営した成果と課題をもとにPDCAサイクルを回し、第2回の食堂運営に向けて改善策を練り上げました。グループで考えた提案内容を分かりやすく納得させるための方法やプレゼンを工夫し、準備を進めました。



全世代が楽しめる雰囲気や内容を考える必要がある。

世代をこえての交流が少なかった。



スライドの工夫や説明内容の精選

☆河内特産の野菜や米の栽培  
☆栄養バランスを考えたメニューの考案  
☆野菜や菊販売で得た予算内での必要な準備物の購入



企画内容の魅力を伝えるチラシの作成

## ③ 課題改善を目指した2回目の食堂運営

2回目の運営では、企画内容の提案・進行、メニュー作り、会場作り等クリスマスパーティーをトータルプロデュースしました。小さな子供からお年寄りまでが笑顔で交流したり、食事をしたりする姿が見られ、楽しい時間を提供することができました。



世代をこえた交流と食事タイム



お客さんみんなで完成させたクリスマスツリー



「しあわせこうち食堂」に興味を持ち、次回開催への呼び込みのために、河内コミュニティーセンターに掲示させていただきました。

## (2) 小学校6年生(三次小):地域の思いを受け継ぐ「地域の役に立ち隊員ジャー」

「三次町の未来がどうあってほしいか?」というアンケート調査をもとに、地域のために実現可能な取組を考えます。



ぼくは、三次の自然や文化、特産物、観光地が載っているトランプを作ったらいいと思う!遊びながら三次を思い出し、再び三次を訪れたいと思ってほしい。

アイデアはいいけれど、実現は難しいかな?

コストと置く場所が...



三次もののけミュージアムでトランプ設置のお願い



### 児童の感想文

トランプは、一万円で20個しか作れないけれど、お願いに回った場所で「買おうよ。」と言ってくれたのでうれしかった。1月末に印刷会社に出す予定だ!今回一番大変だったことは、集めた情報の使用許可をお願いすることだった。たくさんの人と話して、たくさん食べて、観て、三次ってすごいなともう一度感動した。

トランプを作成しようと思っています。  
写真を使わせて頂けませんか?

これまでの活動を踏まえ、三次町の役に立つことができたか、再度アンケート調査を行い、目的が達成できたかを分析をします。授業だけではなく、地域行事やボランティア活動へ主体的に参加をするようになりました。

### (3) 中学校(三次中): 社会実装を目指す「グッドタウンみよし」

義務教育9年間の集大成となるのが、三次中学校3年生の「グッドタウンみよし Season3 ～企画を実行しよう～」です。ここでは、模擬体験ではなく、実際に社会の中で企画を動かす「社会実装」を目指します。

生徒たちは、「観光客誘致」「商店街活性化」「特産品PR」などの課題に対し、興味関心に応じてチームを結成しました。そして、以下の4つのプロジェクトが動き出しました。

#### ① 企画グループ

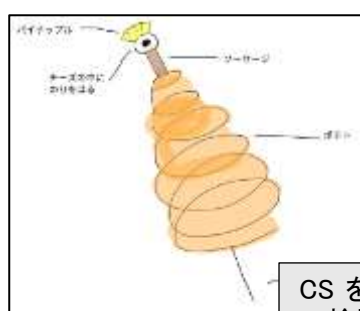
三次独自の観光資源である妖怪伝説『稲生物怪録』に着目し、「若者が来るイベントがない」という課題に対し、ターゲット層を分析し、恐怖とエンターテインメントを融合させた「お化け屋敷」を企画しました。実施場所の確保や安全対策について、地域の方と何度も交渉を重ねました。



お化け屋敷の会場準備や技術分野の知識を活かした仕掛けにも挑戦しました。

#### ② 食グループ

「地元の食材を使った新しいお土産を作りたい」という思いから、地元の飲食店と連携しました。試作を重ね、もののけ文化を活用した「オリジナルポテト」などの新商品を開発しました。パッケージデザインから価格設定(プライシング)、販売戦略まで、マーケティングの視点を取り入れた実践的な学びが展開されました。



CS を活用してオリジナルメニューの検討を行いました。

### ③ グッズグループ

三次にまつわるグッズ製作や体験活動を通して、大人のみならず、子どもも楽しめる取組を考えました。お面やうちわ作りなどから、どのようにして三次の魅力を知ってもらうかアイデアの改良を重ねました。



うちわのイラスト

### ④ 広報グループ

企画を成功させるには「集客」が不可欠です。SNSを活用した情報発信や、プレスリリースの作成、ポスター掲示の依頼など、情報モラルを遵守しつつ、効果的に情報を拡散する戦略を実行しました。



ケーブルテレビやもののけミュージアムのアカウントを活用して「もののけ秋祭り」を宣伝



三次観光案内所で自ら制作したパンフレットの設置

これらの活動には、CSを中心として三次観光推進機構、商工会議所、市役所広報課など、多くの専門家が「メンター」として伴走しました。生徒たちは、「予算が合わない」「その企画では人が集まらない」といった大人の厳しい意見(本気のフィードバック)に直面し、壁にぶつかりながらも企画を修正しながら、実現に向けて地域の方々と協力をしていきました。

## 4. 先生方の声・インタビュー

～「探究×地域社会との共創」で変わる子供と教師の姿～

——「探究×地域社会との共創」の取り組みを通して、どのような手応えを感じていますか。

杉原 教諭(研究推進リーダー):

子供たちが、地域に出て取組を進めていくに当たって、「自分たちが地域を盛り上げるために、できることは何だろう」と試行錯誤していくことができるようになったことです。

「自分たちのアイデアで町が盛り上がった」「地域の人にありがとうと言ってもらえた」

PBLを通して得たこの自己効力感こそが、子供たちにとって次の学びへ向かう強力な要因となっています。授業以外の場面でも地域住民と積極的に関わったり、生徒会が地域と協力して企画を考えたりすることができるようになりました。

——学校全体で取り組む意義について教えてください。

角濱 校長:

最大の意義は、義務教育9年間という長いスパンで、子供たちの成長を「縦のつながり」で見守り、支援できる点にあります。

本校区では、三次小学校・河内小学校という異なる文化を持つ小学校の子供たちが、同じ三次中学校に進学します。だからこそ、小学校段階から「どんな力を育てるか」というビジョンを3校で共有し、カリキュラムを一貫させることが不可欠です。

また、教職員が校種を超えて「みよし学園」としてワンチームになることで、小中の段差(ギャップ)を解消し、子供たちが安心して挑戦できる土壌が整いました。3校がスクラムを組むことで、地域への発信力も高まり、「学校が核となって地域を変える」というインパクトを最大化できると確信しています。

## 5. 終わりに

「探究×地域との共創」―三次中学校区の実践が私たちに提示したのは、学校が地域に開かれ、地域が学校を支えるという、教育の「原点」への回帰であり、同時に予測困難な未来を生き抜くための「最先端」の学びの姿でした。

子供たちが作成した企画書やメニュー表のプロ顔負けのクオリティの高さだけではありません。それ以上に印象深かったのは、彼らが語る言葉の端々に、「自分の町は自分たちで面白くできる」という確かな「誇り」と「当事者意識」が宿っていたことです。かつては地域を「してもらい場所」と捉えていた子供たちが、大人との真剣勝負を経て、今や堂々たる「地域の担い手」として輝いています。

地域全体が「学びのフィールド」となり、大人が本気で関わることで、子供たちの可能性は教室の壁を越えて無限に広がっていく。ここ三次市で生まれた「熱」は、これからの広島教育、そして地方創生を照らす希望の灯火となるに違いありません。